灰色提督と桃色の艦娘達

バインド

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある鎮守府にはおかしな提督と艦娘達がいた。

提督は深海棲艦と繋がりがあり、艦娘達は皆変であった。

これはそんなおかしな鎮守府の日常である。

目次

白＋黒＝？ ―― 1
イケメン＋乙女＝天龍 ―― 4
オカン＋罵倒＝霞 ―― 7
ゴーヤ＋オリョクル＝伊５８ ―― 11
春雨＋ジ〇ング＝駆逐棲姫 ―― 16
カメラ＋恐縮＝青葉 ―― 19
お母さん＋居酒屋＝鳳翔 ―― 23
アヘ顔＋サラシ＝武蔵 ―― 27
カタパルト＋アホの子＝利根 ―― 34
幸運＋雨＝時雨 ―― 38
初期艦＋敵＝イ級 ―― 45
提督＋深海棲艦＝家族 ―― 49
揚陸艦＋蜻蛉＝あきつ丸 ―― 54
クール＋マゾ＝若葉 ―― 60
写真＋レコーダー＝修羅 ―― 65

白＋黒＝？

「ふぅ、終わったか」
「ご主人様、それはフ・ラ・グというヤツですぞ」
「ははは、もう書類は勘弁だ」
執務室でいちゃついているこの２人、この鎮守府の提督と艦娘の漣である。
漣は初期艦であり提督と最も仲の良い艦娘だ。
提督に想いを寄せるが、本人は気付きもしない。
この様に
「あの・・・ご主人さまはこの後予定ってありますか？」
漣が顔を赤らめモジモジとしながら提督に聞くのだが。
提督は
「いや、今から待ち合わせがある」
と、即答した。
「そう、ですか・・・」
これには意気消沈せざるをえない漣。
待ち合わせという単語に更に消沈する。
しかし漣は
（挫けないんだから！）
と、諦める気などさらさらない様だ。
「じゃ、もう行くから留守は頼むぞ」
漣は提督からの頼まれごとに嬉しくなり満面の笑みで敬礼をした。
「かしこまりました！ご主人さま」
提督が立ち上がり敬礼をして執務室から出て行く。
一人ポツンと残った漣は深く深呼吸をしてから周りを見回した。
そして誰も居ないことを確認すると先程まで提督が座っていた椅子の部分を舐めだした。
「ぺろっ・・・れろっ・・・ごひゅじんひゃまぁ・・・れろれろっ・・・」
駆逐艦漣は・・・ペロリストであった。
あれ？もしかして頼られて喜んでたんじゃなくて居なくなるから

喜んでたの？
え？両方？ああ、そう。
提督は鎮守府を出て、トラックで浜辺へ向かった。待ち合わせの場所なのだ。
到着すると、既に人が待っていた。
車を止めて走り出し、提督はその人に近づき被っている帽子を取り、頭を下げた。
「遅れてすまない」
「私は大丈夫よ司令官！」
そう言ってにこりと笑って許してくれた。
提督は顔を上げ笑い返す。
「ありがとう、今回も頼らせてもらうよ」
「これからも、もっともっともぉーっと私に頼っていいのよ！」
「はは、よろしく頼むよ」
浜辺には、一人の少女がいた。
しかし、人間ではない。
【戦艦レ級】
人類にはそう呼ばれている。
「日本語は完璧だな」
「この私の本気なのよ？当然じゃない！」
人類の敵であるレ級と人類を護るべき提督が話し合っている。
いま、この空間がどれ程異質なものなのかお分かりいただけるだろうか。
「それじゃ！早速取り掛かるわ！」
「ああ、お願いする」
「任せといて！」
レ級が荷台のドアを開け、艤装を展開した。
すると尻から蛇の様なものが現れ、口をトラックにの荷台へ向けた。
そして

『オロロロロロロロロロロロロロロロ』
口から沢山のボーキサイトが出てきた。
ボーキサイトはあっという間にトラックの荷台を埋めた。
「今回もありがとな、うちはボーキサイトよく無くなるからな・・・ハァ」
提督が溜息を漏らす。
きっと食う母達の事だろう。
「元気ないわねーそんなんじゃ駄目よぉ！」
「そうだな、じゃあ本題に入ろう・・・・・・　過激派はどうだ？」
提督の纏っている空気が変わる。
「今の所動く気配は無いみたいよ」
「そうか・・・・」
「あと駆逐棲姫ちゃんが会いたがっていたわ！」
提督の脳裏に一人の少女が浮かぶ。
「そうか、もう少しで長期休みがあるから待っていてくれと伝えてくれ」
「わかったわ」
「じゃ、少し遊ぶか？」
「いいわよ？鬼ごっこで勝負しましょ！司令官が鬼ね！」
レ級が浜辺を走り出す。
提督もふっ、と笑って走り出した。

その後、門限を過ぎて大淀に正座させられる提督と港湾水鬼に正座させられるレ級がいたとかどうとか。

イケメン＋乙女＝天龍

カリカリグゥーカリカリスピーカリカリむにゃむにゃ
執務室には提督が走らせるペンの音といびきが響く。
提督が座っている執務机の前に設置してあるソファーで寝ている艦娘。
彼女の名は天龍、おっぱいの付いたイケメンである。
遠征から帰投し、疲れていたのかそのまま眠ってしまった。
本日秘書艦の雷はもう執務室にはいない。
ここの鎮守府では午前７時から午後９時までを秘書艦の勤務時間としている。
駆逐艦達の事を思ってこの時間なのだ。
とある駆逐艦だけは本人の希望により２４時間勤務になっている。
因みに提督の勤務時間は午前７時から午後１０時までである。
実は今日の書類は終わっているのだが、先日門限を破った為その反省文を書いている。
提督がふと時計を見る。
そして時刻が午後１０：４８分を指していることを確認するとペンを置いて身体を伸ばし、硬直した。
提督は集中し過ぎて今の今まで天龍が寝ている事に気が付かなかった。
このままでは風邪をひいてしまうと思い天龍を起こそうと椅子から立ち上がり近づく。
そして優しく声をかけ、身体を揺する。
「おい、天龍、起きろ」
「んっ・・・　ん～？」
天龍は眠たそうに目を開ける。
「提督が俺の目の前にぃ？・・・　夢かぁ？」
「はは、何を言ってるんだ」
提督は何時ものイケメンな天龍の寝ぼけている姿をおかしく思い、少し遊ぶ事にした。

「これは夢に決まってるだろ?・」
「そうかぁ、夢なんだな・・・ って事は何をしても大丈夫なんだよな?・」
「確かに夢だしな」
!?!?!?!?!?
すると天龍がいきなり立ち上がり提督にキスをした。
いきなりの事で提督の脳内はパニックを起こしていた。
すると天龍が唇を離して
「あ、やっぱ無理だ」
そう呟き、倒れた。
提督は急いで天龍をお姫様抱っこで持ち上げ工廠へ向かった。
鼻と股からオイル漏れをしており顔が赤く、呼吸も速い。
工廠の扉を叩き叫ぶ。
「明石!居るか!・」
「はいぃ!?提督!?い、今開けます!・」
工廠の扉が開き、明石が出てくる。
「明石!天龍の修理を頼む!オイル漏れだ!・」
「わ、わかりましたぁ!・」
天龍を明石に預け、ほっと一息つく。
するとスマホが震えている事に気が付き、直ぐに電話に出る。
「あ!司令官?・」
「どうしたレ級」
「過激派が動いたのよ!・」
「!?何処に!・」
「○○鎮守府の方ね!・」
「あそこか・・・ わかったありがとう。引き続き報告を頼む」
「レ級、司令官のためにもっとも~っと働いちゃうねっ?・」
「ああ、ありがとう」
そう言って電話を切る、するとメールが来ている事に気が付きメールを開く。
短く纏めると大規模な防衛戦の為に物資を送れ、というものだった。

すると工廠の中から明石が出てきて
「提督、ここは明石にお任せ下さい。提督は明日もお早いでしょう？」
「だが・・・・ ああ、頼む」
そう言って提督は執務室へと戻る。
そして今ある資材を確認する。
後の仕事は明日やろうと提督室へ行き、ベッドにダイブ。
そのまま眠りについた。

「天龍さん、どうしてオイル漏れなんか起きたんですか？」
「いや・・・ その・・・」
その頃返答に困る艦娘がいたそうな。

オカン＋罵倒＝霞

夜、提督は執務室で寛いでいた。
「ふぅ～、仕事終わりのお茶は美味いな…」
大規模な防衛戦が控えている、忙しく働いている提督がいると言うのに自分が酒を飲む訳には行かない。
まぁ、遅くまで働いたんだ。お茶をゆっくりと飲む時間位は許されるだろう。
そう思いまた温かいお茶を飲む。
「だから何よ？」
「ありがとう霞」
「あっ… えっと… 別にっ、嬉しくも… なんともない… わ…」
彼女は駆逐艦霞
キツイ喋り方をするが面倒見がよく、優しい女の子… おばあちゃん？いや、なんでもない。霞は女の子だ！うん！
そしてその喋り方も艦時代に… いや、この話は止めておこう。
おほん、しかも火傷しない丁度いい熱さのお茶を執務終わりに渡してくれるという気遣いも出来る。
仕事が残っていると夜遅くまで罵倒しながら手伝ってくれる。
これはいいおかん… 嫁さんになるな！
いや、子供が出来たら結局おかんだからいいのか。いや、お艦か？
ただ私は遠慮したいな。Mじゃないから。
そんな霞だが最近執務室に忍び込んでいるという噂がある。
これは確かな筋なのだが… 正直信じられない。
何か執務室でやる事でもあるのだろうか？
私に言わないという事は何か知られたくない事かもしれない。
だが、どんな事であろうと執務室に勝手に入るのはいけない。
もし本当なら何らかの罰を与えなければならない。
なので今日はその噂の真偽を確かめようと思う。
残っているお茶をグイっと飲み干し、机に湯呑みを置く。
「よし、部屋に戻るから電気消すぞ～」

提督は立ち上がり部屋の角にあるスイッチを押すため歩き出そうとしたが
「ち、ちょっと待ちなさいよ！」
霞にストップをかけられた。
「どうしたんだ？」
「ちょ、ちょっとやる事があるから先に部屋に戻ってくれない？電気は消しておくから」
む？やる事？怪しいな。
ここで艦娘がやる事と言ったら執務しかない。
それ以外に何があるというのか。
まぁ、今は従おう。侵入を待つ手間も省けるしな。
「わかった、遅くまで起きてるんじゃないぞ？」
「分かってるわよ！」
少し早足で執務室から出て、扉を閉める。
そして扉の横で待機。
（3分経ったら突入して何をしているか突き止めてやる）
提督は燃えていた。腕時計で時刻を確認し息をひそめる。

提督は腕時計を確認し、突入の覚悟を決めた。
3分経っても出てこなかったのだ。
中で何をしているのだろう。
扉に耳を当て音を聴く。
執務室の中から聞こえて来るのは機械の振動音と霞の声だ。
提督は大きく深呼吸をして、扉を開け突入した。
執務室の中には
扉の方を向き、執務机の上で電動マッサージ機を股に当て足がVの字になっている霞がいた。
霞が扉の開く音に意識を向け、目が合った。
「えっ・・・」
霞は何が起きているのか分からず目をパチパチとさせていた。
「む？」

提督も霞が何をしているのか分からず固まっていた。
部屋は静寂に包まれ・・・ 失礼。
電動マッサージ機の機械音のみが静寂を阻んでいた。
霞の方が提督よりも早く我に返り
「ななっ、ななななんでいるのよ!」
姿勢はV字開脚のまま霞は提督に問う。
すると提督は
「・・・・ すまない」
土下座をした。
「ちょ、ちょっと司令官?どうしたのよ!?あっ・・・・」カチッ
いきなりの土下座に戸惑いを隠せない霞。
そして自分の姿勢をようやく認識し、机から降りて電動マッサージ機の電源を切った。
電源を切ったと同時に提督は申し訳なさげに話し出す。
「霞・・・ すまない」
「い、いきなり何よ?」
「まさかそこまで疲れを溜めているとは・・・ 私のミスだ。すまない」
提督が更に額を床に擦る。
霞がぽかんとする。
「えっ?な、なんの事なの?というか顔をあげなさいよ!」
提督がゆっくりと顔を上げる。
その顔は嬉しく、そして悲しい顔をしていた。
「私を気遣って分からないフリをするな。あまりにも疲れが溜まっていて、耐えきれず私の電動マッサージ機を内緒で使ったのだろう?何も私に言わなかったのは私やみんなに心配して欲しくなかったからなんだろう?」
まったく、本当に優しいな、霞は。
ん?視界が霞んで・・・ まずい!
「そ、そうよ!まったく、なんで気づかないのかしらこのク《ガバッ》じゅうううう!?」
提督は、いきなり霞を強く抱き締めた。

霞は慌てふためく。
「いっ、いいいいいいきなりなななな「霞」!?」
抱き締めながら提督は話す。
「私はこんなクズでも霞の上司なんだ。お前の仕事の負担を減らしたりするくらいはできる。だから、辛かったらせめて相談くらいはしてくれ」
私の涙目になっている顔を霞に見せる訳にはいかない。
涙を流さないよう上を向く。
「スーハー… スーハー… クンカクンカ… イ… クゥ… うっ…」
霞は身体を震わせ、呼吸は深く、時々鼻を鳴らし、声を押し殺している。
どうやら霞も泣いているみたいだな。
泣き止むまでそっとしておこう。
二人はしばらく抱き合っていた。

後日、提督は霞に電動マッサージ機を買ってあげたそうな。
ずるいずるいずいずいずいうんとみんなが言うもんだから、みんなに買ってあげたんだって。

ゴーヤ＋オリョクル＝伊５８

提督は、今日も執務室で書類を書いていた。
今日は防衛戦に関しての書類が多く、何時もの書類の倍はあるだろう。
お腹が空いているが食堂に行く余裕はない。
今日は会いたがっていた駆逐棲姫と遊ぶ約束があるのだ。
どんなおもちゃを持って行こうか・・・ おっと、集中集中。
因みに提督は朝食も抜いている。
空腹を抑え、執務に取り組んでいると柱時計が鳴った。
ふと柱時計を見ると正午を指していた。
「ヒトフタマルマルでち。お昼食べてから、もっかい執務やるー」
今日の秘書艦は伊５８。みんなからはゴーヤ、でっち、オリョクルなどというあだ名で親しまれている。
まぁ、オリョクルは敵艦隊が強化されてしまったのでもう出来ないが・・・
私はあだ名では無く普通に５８と呼んでいる。
ゴーヤと呼んでも良いと初めて会った時に言ってくれたが、初対面であだ名は如何なものかと思い、まずは５８と呼ぶ事にした。
いつかあだ名で呼んであげようとも思っていた。
しかし、私は見てしまった。
彼女がろーにでっちと呼ばれて怒っているのを。
もしや彼女はあだ名で呼ばれるのを嫌がっているのではないかと考えた。
出来るだけ早くここに馴染む為の術であだ名を使ったのではないかと思ったのだ。
自分の感情を押し殺して。
ろーの件ではその嫌がっている感情が出てしまったのではないかと。
彼女に問い詰めても嘘を言われる可能性が高い。

なので今は同じ潜水艦のイムヤに探って貰っている。
頼む時、イムヤに溜息を吐かれた。
気付くのが遅過ぎだということだろう。
提督としてまだまだ不甲斐ないな・・・
「てーとく、一緒に行こ?」
満面の笑みで提督に呼びかける伊５８。
「すまない、今日は書類が多くて昼は抜くつもりなんだ。一人で行ってきてくれ」
そうだ、まずは書類だ。
本当に今日は絶食しないと約束に間に合わないかもしれない。
「わかったでち・・・」
伊５８はガックリとして椅子から立ち上がり、とぼとぼと執務室から出て行った。
うっ、罪悪感が・・・
いやいや、罪悪感を感じる時間すら惜しい！
よし！やるぞぉぉぉぉぉ!!
カリカリカリカリカリカリカリカリカリカリ

数十分後
「てーとく！」バァン
執務室の扉を開け放ち伊５８が飛び出してきた。両手に料理が乗った皿を乗せて。
「提督提督ー！　これ食べるでち！　ゴーヤ特製『ゴーヤチャンプル』でち！」
どうやら料理はゴーヤチャンプルの様だ。
「お昼食べないと力がでないでち！」
成る程、確かにそうだ。
ご飯を食べないと力が出ないし空腹で集中も出来ない。
そして今なら食堂に行く時間を短縮できる！
取り敢えず書類を机の隅に置いてっと。
「ああ、ありがとう５８。いただくよ」

私を思って作ってくれたゴーヤチャンプル・・・・ あれ？
「５８？ご飯は？」
「チャンプルはおかずじゃないでち！」
あ、５８の中ではゴーヤチャンプルは主食なのか。
じゃあおかずは・・・ いや、チャーハンみたいなものか。
それではいただくとしよう。
「いただきます」　「いただきますでち」
モグモグモグモグモｇ「てーとく」「ん？」
不意に伊５８が提督に話しかけた。
「てーとくはどうしてゴーヤを５８って呼ぶでち？」
これはあのあだ名の問題か・・・ ここはさり気なく話をそら・・・ いや、いいチャンスじゃないか！ここで話をきちんとしよう！
まぁ、いきなり聞いても駄目だからな。
最初は普通に。
「名前の通りじゃないか、別におかしい所は無いと思うが」
「いつ提督はゴーヤって呼んでくれるでちか？イムヤだってはっちゃんだってあだ名では呼んでるのに」
おっといきなり核心か。
うーん、正直に言うべきなのかなぁ？でも・・・ いや、あだ名の説、あれは仮説だ。もしかしたら別の何かがあるのかもしれない。
ここは思い切って・・・
「最初は早くあだ名で呼んであげようと思ったんだかな、ろーにでっちってか呼ばれて怒っているのを見てな、もしかしたらあだ名で呼ばれるのが嫌なｎ「そんなわけないでち！」
ん？違うのか？
「じゃあなんで怒ってたんだ？」
「それは・・・ その・・・・ で、でっちって提督に呼んでもらいたかったんでちっ！・・・ あ、これは・・・ そのぉ・・・ でちぃ・・・・」
そういう事だったのか。
子供に良くある独占欲というやつだな。
こうじゃなきゃやだ！みたいな。

成る程、納得がいったぞ。
「でっち」　「あひぃ！」
「ごめんな、気づいてやれなくて。これからは沢山呼んであげるからな」
「あ、ありがとでちぃ・・・」
うん、一件落着だな。早速沢山呼んでやるとするか。
「でっち」「んほぉ！」
中々独特な返事だな。そして何故変顔をしているんだ？
伊５８の今の顔は頬を染め、白目を剥き、舌を垂らしている状態である。
「今まで呼んでやれなかったからな、今日は沢山呼んでやるぞでっち」
「イグゥ！」
「でっち！でっち？でっちでっちでっち？でっちー？でっちー！」
「ん，，お，，お，，お，，！，，も，，う，，や，，へ，，る，，て，，ち，，ぃ，，ぃ，，ぃ，，ぃ，，じゅ，，っ，，どいぎゅうぅぅぅ!?・・・アヘェ」ガクッ
伊５８は、唐突に意識を手放した。
それに気付いた提督は
叫び過ぎて疲れて寝てしまったのか？
などと思い椅子から立ち上がり伊５８を仮眠室へ運ぼうとすると、床に何か液体が溢れている事に気が付いた。
そして提督は思った
これは・・・　油か？ゴーヤチャンプルを作る時にゴーヤが溢して、その水着のままゴーヤチャンプルを持ってきたのか？
でも匂いが・・・　いや、間宮が新しい油でも買ってきたんだろう。
自分の事ではなく私を優先して・・・・　ありがとう５８・・・・　いや、でっち。
提督は執務机の引き出しからミニタオルを出して伊５８を拭いた。
伊５８は何故か拭かれるたびに身体を跳ねさせていた。
これでよし、後はこのソファーに寝かせてっと。
よーし、ゴーヤチャンプル食べたら続きやるぞ！

うめぇ・・・

春雨＋ジ○ング＝駆逐棲姫

夜中、提督はこっそりと鎮守府を抜け出した。
大淀にバレてしまうと説教をくらうのだが、約束なので仕方がない。
ある程度鎮守府から離れると押してきたバイクに乗り、走り出した。
深海組とよく待ち合わせ場所として使うあの浜辺へと。

提督が浜辺近くの駐車場に着くと、バイクから降りて時計を確認する。
うん、まだ１０分前だから余裕だな。
のんびりと歩いて浜辺へと向かう。
浜辺へ着くと提督は辺りを見回して
「まだ・・・ 来てな「司令官、真夜中です。はい」!?」
提督は辺りをもう一度見渡す。
しかし、誰もいない。
「あの・・・ 下です」
提督は下を向き驚く。
何故なら足下には横たわった悪雨・・・ 失礼、駆逐棲姫がいたからだ。
「な、なんで倒れてるんだ？」
「少し、疲れてしまいました・・・ はい」
話を聞くと、どうやら私と遊ぶのが楽しみではしゃいでいたら私と遊ぶ前に疲れてしまったらしい。
可愛いなこのヤロー！
取り敢えず口に砂入るから仰向けにしてっと・・・ 今日も疲れたし俺も寝転ぼ。
うわっ、すげぇ綺麗な星空だな。
ってか夜空を見上げるなんて久しぶりだなぁ・・・ 天を仰ぐ事は執

務室でよくあるけど。
「司令官、夜空が綺麗ですね。ずっと見ていたいです」
「ああ、そうだな」
小さい時におじさんに星座教えて貰ったなぁ。懐かしい。
今では大淀に正座を教えて貰っているとはな。恐ろしい。
「あっ、あの。司令官、今日も本当にお疲れ様でした」
「ありがとう。どうだ？最近」
うわぁ、娘に喋りかけるお父さんみたいになってるぅ・・・
だ、だって遊ぶと思って話題なんか全然持ってきてないんだもん！
「新しい艦が、はい、出来ました」
うーん、それはレ級に聞いたし俺が聞きたいのはそうじゃ無いんだよ！
「いや、そうじゃなくてだな。自分の事で何かないか？」
「ううっ、ごめんなさい。そう言えば、鎮守府の長門さんが悪雨ちゃんって言いながら私を捕まえようとしてました。はい」
あいつめ・・・ 帰ったら陸奥に頼んで叱ってもらおう。
「すまない、私から言っておこう」
「あ、あの・・・ 司令官。私と遊んでくれませんか？」
ははははは、何を言っているんだ？
「その為にここに来たんだろ？」
「！・・・・ はい！」

駆逐棲姫さんや、鬼ごっこでジオ〇グはずるいですって。
空飛ばれたら勝ち目ないですやん。
む？・・・・ なるほどピンクパンtグハッ！
いきなり叩かないで！・・・・ おや？
「駆逐棲姫、日の出だ。もう帰らないとな」
「!?・・・・ あの、次は・・・」
「もう少しで長期休暇に入るから、また遊ぼうな」
「・・・・ はい！」

よし、帰るか！
ってか徹夜だし服は砂だらけだし・・・　また大淀に怒られるなぁ・・・
あ、おもちゃ用意したのに持ってくるの忘れちゃったよもう。

提督が来る前のまだ元気だった駆逐棲姫
「司令官は鎮守府でも元気にやってるかな。うっ・・・・　ふう・・・」
提督が来る直前の駆逐棲姫
「アヘェ・・・」バタッ

その後提督は大淀に正座を教えられましたとさ。

カメラ＋恐縮＝青葉

提督は取材室と呼ばれる部屋に一人の艦娘と向かい合って座っていた。
「今日は取材活動へのご協力ありがとうございます！」
彼女は重巡青葉。よく艦娘の自然な写真を私に見せてくれる。
きわどい写真を見せるのは止めて欲しいが・・・
提督は今日、彼女の取材を受ける約束をしていた。
「ああ、なんでも聞いてくれ」
「恐縮です！」
なんでも私が答えてあげよう！
あ、答えられる範囲な。
「では！提督のお好きな料理は？」
うーん、沢山あるんだが・・・ 響が最近もって来てくれたアレかな。
「ボルシチだな。響の作ってくれたものがとても美味しかったのでな、ハマってしまったよ」
「そんなに美味しいんですか？」
ああ、また作ってもらって食べたいなぁ。
おいそこ、ロリコンって言うな。
あ！そうだ！
「今度響に頼んで作ってもらったらどうだ？」
「はい！そうさせていただきますぅ！」
そして俺の分もお願いしようっと。
「では次に！提督がこの鎮守府で一番思い出に残っている事は？」
沢山思い出はあるんだが・・・ 一番と言われると・・・
「うーん、一番か・・・ あ！居酒屋鳳翔を建てたときだな。あの時の鳳翔の嬉しそうな顔は忘れられないな」
未だにあの笑顔は鮮明に覚えている。
何時もは物静かなんだがあの時は飛び跳ねて喜んでいたなぁ～。
あれ？青葉あの時の写真を新聞に載せてなかったか？
後で艦隊新聞を確認するか。

「ふむふむ、提督の好きな時間は？」
「一人で読書をしている時かな」
ゆっくり自室でコーヒーを飲みながら本を読むのが・・・ ああ、至福だ。
「どのような本を読んでいらっしゃるんですかぁ？」
「今は孫子を読んでいるな、どうだ？貸してやるぞ？」
実に面白いぞ？為にもなるしな。
「恐縮です！ぜひぜひ！」
「ああ」
と、青葉の質問責めは続き、ついに最後の質問に。
「最後に、提督は艦娘の事をどう思っていますか？」
「ふむ、艦娘の事か・・・」
うーん、なんて言ったらいいんだろうか・・・
そういえば艦娘は兵器か人間かっていうので問題になったなぁ。
正直どうでもいいとは思うがな。
だってそんなものは考えるだけ無駄だろ？
彼女達は私達を守ってくれる。それだけで十分じゃないか！
兵器か人間かなどは関係ない。
使えるか否か・・・ だ。

なーんて冷徹になれないのが俺なんだよなー！
捨て艦とかやった事もないわ！
大破進軍なんて女神あっても出来ないチキンですよ！
だって沈めたく無いんだもの！
まぁ、艦娘をどう思うかと言われると・・・
「大切な存在・・・ だな」
「大切な存在・・・ ですか？」
「ああ、艦娘は海を守る為にとても大切な存在。そして私にとっては部下であり、娘の様な大切な存在・・・ なんか恥ずかしいな」
いやぁぁぁぁ!!恥ずかしいよぉ！顔からインフェルノしちゃうよぉぉぉ!!

そして
「まぁ、彼女達が私の事をどう思っているのかは知らないがな」
これが一方通行だったらさらにはずかしい・・・
そんな事を提督が考えていると、青葉がくすりと笑い・・・
「…気になるんですかぁ？いい情報ありますよぉ？」
失礼、悪い笑みを浮かべねっとりとした声で提督に聞いた。
なんだと!?そんな情報まで青葉は手に入れているというのか！
むむむ、実に気になる！だがしかし！
「いや、大丈夫だ。私は彼女達を信頼している。彼女達がどう思おうとそれだけで充分だ」
はい、本当は聞くのが怖いだけです。
空母や戦艦ならまだしも駆逐艦達から嫌われたら俺はもう精神を病んじゃうよ・・・
「そうですか・・・　これで取材はお終いです！ありがとうございました！」
「ああ、ありがとう」
そう言って二人が椅子から立ち上がる。
ふぅ、やっと終わったか。
「あ、いい顔！　いただきますぅ！」パシャ
ぬおっ！眩しい！
「いきなり撮らないでくれ。というか私の写真なんかなにに使うんだ？」
「え、今の写真ですかぁ？　あ、青葉、艦隊新聞に使わせていただこうかと……え、ダメ？」
「別に駄目ではないが・・・　今みたいに急に撮るなよ？みんなびっくりしちゃうからな」
「恐縮です！」
ん？つまり直すのか？直さないのか？
「それではありがとうございましたぁ！」バタン
そして一人残された提督。
「ふぅ・・・　そうだ艦隊新聞・・・」

廊下をスキップしながら青葉は自室へと向かう。
そして撮った写真を確認する。
少し顔を緩めた提督の写真。
涎を垂らしている事にも気付かず青葉は自室へと到着した。
そしてドアノブを回し扉を開けた。そこには…
壁や天井一面に提督の写真がびっしり貼られている部屋があった。
「提督の新しい写真… ガサは出撃… 青葉、じっとしてられないな」
青葉は撮ったばかりの提督の写真を見ながら手を下に…

その後、帰って来た衣笠に怒られたそうな。
「また青葉は一人で楽しんで！次は二人でって言ったのに！」
「き… きょーしゅきゅ… れしゅ…」

お母さん＋居酒屋＝鳳翔

「あー、終わったー！」
提督がペンを置き、両手足をぶらぶらさせる。
すると机に温かいお茶の入った湯呑みが置かれた。
「おお、鳳翔か。すまんな」
「いえいえ。お疲れ様です。お風呂にしますか？ご飯にしますか？それとも・・・ ふふっ、じょうｄ「そうだ、今日は鳳翔にするか」・・・ ええっ!?」
彼女の名前は鳳翔、又の名をお母さん・・・ というかおばあちゃ・・・すいませんこちらに弓を構えないで下さいお願いします！・・・ おほん、失礼。
提督が着任する前からこの鎮守府にいる古参艦である。
今はもう出撃はしておらず空母達の先生をしたり居酒屋を経営したりしている。
「わ、わわ私ですか!?い、いえ、嫌ではありませんむしろ・・・」
（い、いつまでも演習って訳にもいきませんっ！）
「そうか、では早速行こうか」
「は、はいっ！」
（やる時は、やります！）
提督の私室は執務室の右手にあり、私室と執務室は扉一枚で行き来する事が出来る。明石に取り付けて貰ったらしい。
鳳翔が提督の私室につながる扉を開けようとすると
「何してるんだ？先に行くぞ？」
「えっ？」
鳳翔が驚き、声のする方を向くとそこにはコートを着た提督が廊下から執務室の扉を挟んで呼び掛けていた。
鳳翔は不思議に思ったが何か考えがあると思い歩き出した提督について行く事にした。

いやっほー！久々の居酒屋鳳翔だぁ！なかなか行けて無かったんだよなぁ。
だが、今日は行ける！執務が多く、遅くなってしまった事により駆逐艦達の目を気にしなくても良いのだ！
向かう時に駆逐艦に見つかってみろ、ついて来ちゃうだろ？
流石に駆逐艦を居酒屋に連れて行く訳にも行かないよ、教育に悪い・・・ あれ？艦娘って全員成人済みじゃ・・・ 深く考えないようにしよう。
え？夜まで待てばいいって？私室の扉の前には何故か毎日艦娘が居るんです。彼女達が言うには警備だそうです。
もしも夜出ようとしてみろ、俺の警備だからついて来ちゃうでしょ？俺は店で飲みたい派だからありがた迷惑というか・・・ この鎮守府の提督だから警備するのは当然なのでやめろとも言えないし・・・ あ、ちなみに今日の秘書艦は五月雨で護衛艦は鳳翔だ。
お、ついたついた・・・ ん？貼り紙？
居酒屋鳳翔の入り口には【お休み】と書かれた貼り紙が扉に貼られていた。
（提督はどうして私のお店へ？あっ！もしかして提督はそういうのが好きなのでしょうか。秋雲ちゃんに貰ったあの本に確か・・・）
『ところでお客さん、俺の徳利（意味深）を触って見てくれ、こいつをどう思う？』
『凄く・・・ チンチン（方言）です』
『嬉しい事言ってくれるじゃないの、味わってみるかい？』
あら？これは男性同士？
「なぁ、鳳翔」
「は、はいっ！あ、今開けますね」
（どんな事でも、提督のご期待に応えます！鳳翔、出撃致します！）
ガチャ　ガラガラガラ
鳳翔が振り返ってお辞儀をする。
「いらっしゃいませ提督」

鳳翔、休みだったのに俺のために店を…　ありがとう。今度からしっかり確認するとしよう。というかよくよく考えれば鳳翔は今日俺の警備だから休みなのは当たり前か…　さて、どれを頼もうか。あれもいいしこれも…　お！これにするか

「じゃ、鳳翔（酒）を頼むとするか」

「は、はい！鳳翔（艦娘）でしゅね！」

なんでそんなに慌ててるんだ？

そんなことを考えていると鳳翔が着物を脱ぎ出し、そして止まった。

「む？どうした？」

「や、やっぱり私には無理ですぅ～！」

鳳翔はいきなり居酒屋を走り去ってしまった。

「…　何か執務室に忘れ物したのか？…　勝手に一人で飲むか？…　ええぃ！我慢が出来んわ！飲んじゃお！」

三十分後、鳳翔が戻ってきた。

「提督、あの……　どうかと思ったのですが、私も提督の精をお受けできれば、と……　あの……　あら？」

そこには鳳翔（酒）を飲みながら座っている提督がいた。

「おお、鳳翔。忘れ物か？お酒は頂いているぞ。にしても今日は居酒屋鳳翔にして正解だったな。久々に鳳翔が飲めたよ」

そして鳳翔は理解した。

今日は（居酒屋）鳳翔にすると提督が言ったということ、提督は（お酒の）鳳翔を頼んだのだということを。

鳳翔は、目の前が真っ暗になった。

バタン　「鳳翔？…　鳳翔！鳳翔!!は、早く工廠へ!!」

「鳳翔さん、どうしてお倒れに？」

「あの……　ごめんなさい」

「ま、どうせ提督がらみなのはわかってますけどね」

「...」

アヘ顔＋サラシ＝武蔵

「いやぁー風呂はいいなぁ、こう、なんていうか日本って感じだ。あー気持ちいいー」

いやぁ、風呂に一人で浸かると独り言が出ちゃうんだよなぁ。

「あぁ・・・ 風呂は良いな・・・」

「・・・ 何故いるんだ？」

提督は入浴中だった。何故か武蔵と一緒に。提督は武蔵の身体をまじまじと見る訳にはいかないので武蔵に背を向けた。

武蔵、彼女はとても強く、逞しく、そして勇ましく皆を引っ張って行くリーダー的な存在。だが、そのサラシはどうにかならないものかと提督は日々思っている。そして敵の砲弾を自ら受けに行く超ドＭであるが提督は味方を庇ってくれていると思っている。

ここは鎮守府内にある銭湯、ドックとは別で娯楽施設として艦娘や妖精達が利用している。提督も利用しており提督が使用する時は侵入禁止の札がかけられる。

え？今の二人の状態？そりゃ勿論皆様のご想像通り、双方裸です。やったね！

「うっ・・・ この・・・ バイタルパートまでやられては、な・・・ 仕方ないさ・・・」

先程まで風呂に浸かり顔が緩んでいた武蔵が急に苦しそうな顔をしだした。え？イケメンな武蔵の苦しい顔が想像出来ないって？武蔵の中、大破絵そっくりだよ。つまりアヘ（ｒｙ

「はは、この銭湯にはドックのような修復機能はないから浸かってても治らんぞ？・・・ いや、だから何故いる」

提督は武蔵の冗談を軽く流してツッコミを入れた。提督は涼しそうな顔をしているが実は驚きが一周回って逆に冷静になっているだけである。

因みに何故ここに武蔵がいるのかというと武蔵は提督が女性の裸を見て恥ずかしがる姿を見たいだけ・・・ というのは建前で、本音は提

督の裸が見たい、自分の裸を見て欲しい、はしたないと叱って欲しい、この場でケダモノになって襲って欲しいなどという目的がある。
そして今武蔵は
（提督よ!?・・・ まぁ、そういったことも・・・ 嫌いではないが・・・）
襲われた場合を妄想していたりする。
何故武蔵はここにいるんだ?きちんと侵入禁止の札をかけたはずだが・・・ はっ!もしかして先に入ってたのか!?入る時に誰か居ないか警備の清霜に見てもらい誰も入っていないことを確認して入ったのだが清霜は見落としていたのか・・・ ま、失敗は誰にでもあるからな、責めるなんて事はしないさ。しかも私も気付かなかった。
でだ、つまり私が武蔵の入っている風呂に後から入ったということになる。女性が入っている風呂に後から男性が入る・・・ よし。
「すまなかった」
そう言って提督は急に立ち上がって脱衣所へ歩き出した。
武蔵は少しやり過ぎたかと思った。追いかけて謝ろうと考えていると、提督の次の一言で思考が吹き飛んだ。
「自首してくる」
武蔵は提督の言っている意味が分からなかった。恥ずかしがるでも怒るでも襲うでもなく何故自首なのか。一先ず武蔵は提督を引き止めた。
「相棒!?どうしたというんだ?」
提督は武蔵に背を向けたまま喋り出す。
「私は女性のがいるのにも気付かず風呂に入り、あまつさえ裸まで見てしまった。憲兵に自首するしかあるまい。お前達と今までいれて楽しかったぞ。「ま、待て!相棒!」はは、こんな変態でもまだ相棒と呼んでくれるのか・・・ ありがとう、じゃあな」
そう言って提督が歩き出すと武蔵が回り込み頭を下げた。
「すまなかった!許せ!」
武蔵は提督に頭を下げ軽くイッた。なぜなら武蔵は提督に頭を下げるだけで感じる訓練されたドMだからだ。中破で帰投した時などは提督に視姦されていると思いアヘ顔を晒す程のドMだ。こいつぁ

酷え。
　ゴホン、武蔵の謝罪を聞いた提督はフッと鼻で笑い頭を垂れた。
「武蔵、それはこちらの台詞だ。まぁ、許されない事だがな」
「違うんだ相棒！」
　武蔵は先に風呂に潜んでいた事や、提督の恥ずかしがる姿が見たかった（建前）事や、清霜に見逃してもらった事などを洗いざらい吐いた。
　それを聞いた提督は思った。心臓にとても悪い・・・　と・・・
「本当にすまなかった！清霜は悪くない。償いはする！許してくれ！」
　武蔵は頭を下げ、提督に見えないようにニヤリと笑う。
　きっと提督は裸を見て興奮していて、償いと聞いてＨな事を考えていると予想しているに違いない、きっとＨなお願いをしてくれるに違いないなどと考えていた。提督はＨが出来て、武蔵はＨをしてもらえてｗｉｎ―ｗｉｎである。
（提督の対空火力（意味深）も・・・　まあ、気になるな）
　一方提督は武蔵の優しさに感動し、Ｈな気分どころではなかった。
　武蔵、お前本当にいいやつだよな。俺の間違いを自分の責任に、しかも清霜まで庇うなんて・・・　武蔵、やっぱりお前はすげぇよ。償いをするのは俺の方だぜ。償いとかさせたくないけど、それだと清霜の責任まで取る覚悟を決めた武蔵に申し訳がない。直ぐに実行出来て、償いだから俺の利益になり、かつ武蔵がそれなりに嫌がるものか・・・　風呂場で俺が得して女性が嫌がるもの・・・　はっ！
「よし、では償いをしてもらおう。背中の流しあいをしようか」
「ああ、いいだろう。・・・　うん!?わ、わかった」
　この罰なら妥当だろ。これなら直ぐに出来るし、俺は女性の背中を流して流されて得するし、武蔵は俺に裸を見られる。
　ぐへへ、今宵俺は欲望を解放してクソ提督になるのだフハハ!!
　そして日頃の感謝を込めて背中を洗ってやろうと思う。
「じゃ、早速頼むわ」
　そう言って近くの洗い場に座る。

その時武蔵は必死に考えていた。何故流しあいなのか、いくら考えても分からずとりあえずメリットだけ考えた。提督の背中が流せて提督に背中を流して貰える。武蔵は気付いてしまった。メリットしかない事に…

「大丈夫。この武蔵に、全て任せておけ」

武蔵は座っている提督の背後に移動し、垢すりを手に取り石鹸を擦り付けて提督の背中を洗い始めた。

シャッシャッシャッシャッ

垢すりで提督の背中を流す音だけが欲じょ… 浴場に響き反響する。

（いやー、美女に背中を洗って貰えるとは… 人生なにがあるかわかんないなぁー。静かだな、なにか話題はないだろうか…）

なんておじいちゃんみたいな事を提督は思っていた。

一方武蔵は

（うっ… くぅ… このっ…… イッ… くぅ……）

しつこい汚れと格闘などしておらず、気絶しないように耐えるので必死だった。砲撃に強くても快楽には弱いようだなぐへへ… 失礼。提督の背中を舐めたい、痴態を見て欲しいなど思っているが自重をして身体を洗っている。

少し慣れて来た所で提督が喋りかけて来た。

「その… 最近はどうだ？」

「最近か？最近は、やたらでかいハンバーガー？とやらも流行っているそうだな。食べてみたいもんだ」

お、武蔵もそういう流行に乗るようになって来たか！ハンバーガーか、最近食べてないなぁ… そうだ！

「じゃあ今度一緒に食べに行くか？」

「いいのか!?… あ、いやだが… 皆と一緒でもいいか？」

可愛いなぁおい！ってか武蔵って背中洗うの上手いな。

「いいですとも！」

そんなたわいもない話をしていると武蔵は提督の背中を流し終わった。

「おお、ありがとう。次は私が流す番だな」
「ああ、頼みゅ・・・」（噛んだ）
「任せろ」（気付いてない）
今度は武蔵が座り、提督が背後に。
そこで提督は重大な事に気が付いた。
武蔵、全裸な件である。
提督は天を仰ぎ溜息を吐いてから、覚悟を決めて垢すりを準備する。
因みに武蔵はイキす・・・イキ過ぎてイク事に慣れてしまい、普通に会話出来るくらいになっている。そんなにイッでも気を失わない辺り流石武蔵と言うべきか。そして提督に背中を流して貰える事が未だに信じられなかったりしている。
今度は武蔵から提督に話しかけた。
「どうだ？状況は」
「状況か・・・そういえば深海棲艦が最近活発になって来たから気をつけないとな・・・ま、うちには武蔵が居るから大丈夫だろうがな」
まぁ、この辺りの深海棲艦はこの鎮守府に向かって来ないと思う。主に俺のせい？おかげ？だな。
「あっはは、いいじゃないか。ま、のんびりいこう」
そう喋っていると提督の準備が終わった。
提督は恐る恐る武蔵に問い掛けた。
「武蔵・・・背中流すぞ？」
武蔵が振り向きにかっと笑った。
「これは償い、今は遠慮はなしだ！そうだろう？相棒よ！」
提督も笑い返した。
「ああ」
シャッ
「アヒッ！」
武蔵は身体を突き抜ける電流に声が漏れてしまった。武蔵は焦った。このまま喘ぎ続けてしまうと提督の垢すりで感じているのを気付かれてしまう。武蔵は必死に快楽に耐える事にした。

垢すりで背中を擦った瞬間武蔵は奇声を発して背中を反らせた。
この奇声で提督は焦った。
「だ、大丈夫か!?痛かったのか!?」
「しょ、しょんなきょうげき・・・ きゃにしゃしゃれらようらものらぁ・・・」
武蔵が何故かビクビクしていたので提督は思った。もしかして力が弱過ぎてくすぐったかったのではないかと。提督は次はもっと力を入れる事にした。
「そ、そうか」
シャッ
「んお”っ!」
ぬ、まだ弱いのか?
シャッシャッシャッシャッ
「イクっ、あっ、いいじょ、あれれきょいっひぃ!わらひアへェ、こぎょりゃぁ!」
まだ弱い?ま、確かに人間が戦艦擦っている訳だからな・・・ よぉし!本気で擦るぜ!
ジャッジャッジャッジャッジャッジャッジャッジャッ
「まりゃ・・・ りゃ・・・ まりゃこにょれいろれっへぇ!こにょむりゃひひゃぁ・・・ ひるみゃんお”お”お”お”お”お”お”お”お”っ!・・・ わりゃひま・・・ まんりょく・・・ ら」グデン
「なっ!どうした!?」
一体どうしたんだ!・・・ もしかして逆上せたのか?そういえば俺よりも先に入っていたな。と、取り敢えず脱衣所に連れて行かないと!武蔵、許してくれ!
提督は裸の武蔵を抱え脱衣所に連れて行き、廊下で待機していた清霜を呼び武蔵の事を任せ、籠からスマホを取り出して明石・・・ は小破の暁を修理中だったのを思い出し、夕張にかけて武蔵が逆上せた事を伝えて念の為診て貰えるように伝えた。一安心した提督は今自分がやった事について考えた。
俺は、裸の武蔵を抱え・・・ 胸・・・・

「司令官！鼻血出てるよ!!」「え？」

この後めちゃめちゃ心配された。

カタパルト＋アホの子＝利根

「ふんふんふ～ん」

提督は鼻歌を歌いながら鎮守の庭を散歩していた。

え？護衛艦？一人で散歩したいって言ったらさせて貰えるよ。まぁ、何処かから視線を感じるから名前を呼んだり、俺が危なくなったら飛んで来てくれるさ。仕事熱心なのはとてもいい事だ。

「ん？あれは・・・ 利根か？」

提督は庭の塀にもたれかかって空を見上げている利根を見つけた。せっかくだから世間話でもしようと思い、少し足早に利根へと近づく。

利根、彼女は少しお調子者だ。だが、私は悪い事だとは思わない。自信があるのは良い事だ。自信があり過ぎるのはアレだが・・・ そしてとても純粋だ。よく駆逐艦達と混ざって遊んでいるのを筑摩と一緒に和みながら見ている。あれ？利根が姉だよな？

「ッ・・・」

提督は突如、足を止めた。

なんだ・・・ あの眼は・・・

提督は利根が空を見上げて黄昏れていると思っていた。でも違った。利根は空を睨んでいたのた。

鋭く、そして悲しく。

提督は声をかけるべきか迷った。このままそっとしておくべきか・・・ 提督が出した答えは否だった。

提督たる者！艦娘が悩んだり困っていたら助けてあげるのが仕事だ！え？執務？艦隊指揮？大淀や長門、香取とかに任せときゃいいんだよ！む？上司だから恐縮ちゃうかもって？考えても見てくれ、利根の様子がおかしかったら利根ＬＯＶＥな筑摩が真っ先に気付いて対処する筈だ。なのに利根があの状態、つまり筑摩では解決そ出来ない事・・・ という訳だ。

筑摩についてだろうか、それとも姉妹には話難い事なのだろうか・・・ 提督さんになら話してくれるかもしれない。駄目だったら大

淀と相談しよう。筑摩を呼んでな。
「こんにちは、利根」
「!?」
　提督が挨拶をすると、利根は驚き空から提督へ視線を落とした。
「て、提督か…」
「どうした?空なんか見て」
「い、いや空なんて見てなどおらぬぞ?えっと…　こ、このカタツムリを見ておったのじゃ!」
　利根が指を指した塀の壁にカタツムリがいた。
　ん?カタツムリ?…　あれ?なんとなく陸奥に似ている気が…
　おっと、誤魔化される所だった危ない危ない。
「カ、カタツムリはな?実は塀を食すのじゃぞ?驚きじゃろ?知っておったか?」
　冷や汗ダラダラで目を泳がせながらカタムツ…　失礼、カタツムリのウンチクを語る利根。
「ああ、知っている。というかそれを利根に教えたのは私だからな?」
　どうやら相当焦っているな、そこまでして私に聞かれたくない事なのか…　だがしかし!ここで諦めるような提督さんではなぁい!
「利根」
「な、なんじゃ?」
「何か、悩みはないか?」
「ッ…」
　利根が身体をビクッとさせ歯をくいしばり俯く。数秒の間が空き、利根が提督に問う。
「何故…　そう思うのじゃ?」
「なぁに、利根の眼を見たんだ」
「吾輩の…　目?」
「ああ、とても鋭く、そして悲しそうな眼を…　な」
　「……　のう、提督」
「吾輩な…」
「今日、艦の時の夢を見たのじゃ」

「そう・・・ だったのか・・・」

艦の時の夢、それは艦娘がごく稀に見る悪夢だ。どんな悪夢かは艦娘によるが、軽いものは一切無い。艦娘によっては夜中に奇声をあげたり、ただただ謝り続ける事もあるそうだ。利根を含めてうちの鎮守府ではこれで丁度１０人目だ。あれ？意外と多くない？

「空から沢山の爆弾が吾輩と、皆に落ちてくる夢じゃ」

ふむ、一番多く見られる艦の夢だな。

「過去の事に縛られ、提督に心配をかけてしまうとは吾輩らしくもないな」

「いやいや、こうやって話が出来るだけでも凄いぞ？筑摩の時を覚えてるか？ベッドの中で震えながら籠城していて話すら出来なかったんだが」

あん時の筑摩は凄かったなぁ・・・ まさかただひたすらに布団にこもり続けるとは・・・ それも3日。3日間ずっと筑摩を包んだベッドに話しかけてやっと出てくれた時の感動と言ったらほんと、こう・・・駄目だ。論ずるにすべがござらん。一週間は俺の袖を離してはくれなかったがな・・・ とっても可愛いかった。

「覚えておるぞ、なに、吾輩は筑摩のやつより少しお姉さんなのだからな！心配はいらぬぞ！」

「ははは、そうか。ならばよし！だが、無理はするなよ？もしもまた同じような夢を見たのならすぐに私に相談するのだぞ？出来る事なら何でもするからな」

そう、この鎮守府にいるほぼ全ての艦娘の産みの親！艦娘を愛し！艦娘に愛されているといいなぁ・・・ そんなみんなのお父さんである提督の父性で包み込んであげよう！

「では、一つ頼みがあるのじゃが・・・」

「おう！何だ？」

さぁ！何でもいいぞバッチコイ！

「その・・・ わ、吾輩を抱きしめてはくれぬか？実は憧ｒぬおっ！」

なんだって？抱きしめるぅ？いいですとも！

提督は利根を強く抱きしめた。いや、包み込んだというべきか。そして優しく利根に語りかける。
「利根、あまり一人で抱え込むな。俺を頼れ」
「提督・・・ あっぱれじゃ」ボソッ
「ん？なんか言ったか？」
「いや、なにも言っておらぬ」
「おう、そうか」
二人が抱き合っていると大淀が提督を呼ぶ声が聞こえた。
「む？すまん、大淀が呼んでいるので行かねば・・・ 利根もくるか？」
提督はまだ利根を心配し、声をかける。しかし、提督の心配は杞憂に終わった。
「いや、我輩はもう大丈夫じゃ！安心して執務に専念するがよい！そして明日の休暇も目一杯楽しむのじゃ！」
そう言って、利根は提督に背を向け去っていった。
とても、元気な笑顔で。

幸運＋雨＝時雨

提督の私室にて

（ううっ、こ、腰が痛い。寝返りもキツイな）

腰が痛いという台詞にアレな事やナニな事を考えてしまったそこの君！君は作者と同類だね。（失礼）

提督は寝付けず、ベッドの上で仰向けになり唸っていた。

いやぁ、舞風と踊るのはたのしいんだが・・・ 流石艦娘というべきか、恐るべし体力よ。半日ずっとダンスはキツイって・・・ ま、明日から休暇だしな、付き合ってやらんとな。

ガチャ

ん？扉が開く音？誰だ・・・ また山風が布団に潜り込みにでも来たのかな？・・・ 過激派ってことはないよな？その場合扉の前にいる護衛艦の時雨は何をやってるんだって話だが・・・ ま、あいつらが扉を開けるわけないな。絶対部屋ごと吹き飛ばしてるわ。

そんな事を考えながら提督は仰向けのまま薄っすらと目を開ける。

そこには、月明かりに照らされた乳時・・・ 失礼。時雨がゆっくりと提督のベッドに歩を進めていた。

（なんだ時雨か・・・）

提督は安堵し、目を閉じた。

「提督、寝た？」

びっくりさせないでくれよ・・・ なんだ、眠っているか確認しに来てくれたのか？いい子やん。でも、ここで反応してお喋りをしてしまうと確実に明日起きれない。休暇をエンジョイする為に、早く寝ねば・・・ という事で提督さんは心を鬼にして狸寝入りをします！おやすみっ！

「提督、ごめんね？」

ん？ごめんね？・・・ んお？

提督の頭に浮遊感。時雨が提督の頭を持ち上げたのだ。
？・・・ ああ、枕を変えてくれるのか！確かに少し汗をかいて枕が気持ち悪かったんだ。いやぁー流石時雨、きがきくなーあこがれちゃうなー。
そんな事を考えているとゆっくりと提督の頭が下がる。
よし！これで快眠ができ・・・ ん？枕が変わってない？
パチン　カチャッ
パチン？カチャッ？なんの音なん・・・ おお？な、なんか腹が重くなった気が・・・。
提督のお腹が重い。不思議に思った提督はそーっと目を開ける。
するとそこには・・・
仰向けの提督に馬乗りをしている時雨がいた。
「えっ？」
提督は驚き素っ頓狂な声をあげて目を見開いた。
（ヤベェ！俺の腹に排水量1，685トンの時雨がぁ！死ぬぅ！・・・これを、今叫んだら時雨に殺されるよな・・・）
「あ、提督、おはよう」
「ああ、おはよう・・・ じゃなくて！」ジャラジャラ
!?
提督が少し身体を起こすとジャラジャラと音がした。提督はジャラジャラと音がした首辺りに手を伸ばす。
??ジャラジャラ
????????
!提督は音の原因を掴み、顔の前に上げる。
（くさ・・・ り？）
提督は鎖の端を無意識のうちに探した。片方は、時雨が右手に握っている。もう片方は・・・
（俺の首に巻きついている!?）
提督は焦った。
（やっべぇよ、前読んだ漫画にこうやって首に鎖を巻きつけて引っ張って人を処刑するシーンがあるんだがそれのせいで殺されるとし

か考えられない！・・・ やばい、漫画のワンシーンみたいでめっちゃテンション上がるわ。命の危機だけど）
　失礼、提督は余裕があるようだ。
「提督」
「!!・・・ な、なんだ時雨」
「提督・・・ うそつき」
「・・・・・・・ ???」
　うそ・・・ つき？なんで？俺時雨に嘘なんかついたっけ？
「嘘をつくのはやめてよ・・・ 胸が痛いじゃないか」
「ちょ、ちょっと待て。何のことだ!?」
　わけがわからないよ。
「提督、約束・・・ 覚えてる？」
「約・・・ 束？」
　時雨との約束？なんかあったっけ？一緒に遊ぶ約束とかしたか？
やっべ、マジで覚えねぇ。
「・・・」
「提督」
「？」
「君には失望したよ」
「!?」
「ずっと一緒だって・・・ 言ってくれたよね？」
「？・・・ 当たり前だろう？提督と艦娘・・・ 運命共同体じゃないか」
　鎮守府と海を守る艦娘が沈んだら、鎮守府にいる提督だって危ない。っていうか多分すぐ鎮守府に撃ち込まれて死ぬ。
「じゃあなんで・・・ 休暇を取ったんだい？」
　いや、社畜になれと？いや、まぁ、十分今も社畜だけどさ。
「いや、なんでって「提督は！」!?」
「提督は・・・ 僕と離れたいんだよね？」
　お前は何を言っているんだ。
「もう、うんざりしたんだよね提督。廊下で後をつけたり、服や下着を盗んだり、カメラで監視したり、ご飯に髪の毛とか入れたり、こっそ

りコーヒーに睡眠薬を入れたり・・・ 睡眠薬が効かないのは驚いたけどね」
マジでお前は何を言っているんだ。
「ずっと一緒だって言ってくれたから・・・ 努力したんだ。出来るだけ提督と一緒にいようって。でも・・・ 迷惑だったみたいだね」
努力が方向音痴すぎるだろ！
「だから提督。僕は提督の近くにいるのを控えようと思ったんだ。でもね、手遅れだったみたいなんだ」
最初から手遅れな気が・・・
「提督の近くにいない僕が・・・ 考えられなくなってしまった。僕はおかしくなっちゃったんだ」
最初から（ｒｙ
「だから僕は考えたよ。どうしたら提督と一緒にいられるのか・・・ そして思い付いた」
ふむ、悪い予感。

「僕が提督のご主人様になればいいんだって」
「いや、その結論はおかしい」
「おかしくなんてないよ。提督は僕のペット。だから、提督は僕と一緒だよ？ずっと・・・ ずっと」
意味不明なんだが・・・ 簡単にまとめると、時雨は俺と一緒に居たいだけなんだよな？なんでペットという発想になるのかはよくわからんが・・・ ん？ペット？俺を殺そうとしてるんじゃないのか？
提督は自分の首を触る。
（うーむ？鎖ではないな）
「どうかな提督。その首輪、苦しくない？」
成る程、鎖ではなく首輪だったか。
では、一体どうしたものか。休暇を無しにするわけにはいかんし・・・ というか、これは本当に時雨が望んでいることなのか？俺と一緒に居たいだけならもっと方法があるはず。いや、こんな事を考えるよりやる事がある。俺は時雨との約束を破ってしまったんだ。だか

らまず
「すまない、時雨」
　謝らないとな。
「??」
「約束を、守ってやれなくて」
「何を言ってるんだい？提督は僕とずっと一緒だよ？」
「主人とペットの関係でか？」
「？」
「時雨、お前はこの関係でいいのか？」
「この関係？」
「確かに、ずっと一緒にいられるかもしれない。だがな、お前はこの関係に満足か？少なくとも俺は御免だ。俺は時雨と、こんな関係ではやっていきたくはない」
「!?・・・　そう、だね。僕は提督をペットにしたかった訳じゃない。あ、ちょっとこれ持ってて」
　おお！わかってくれたか。やけに物分かりがいいがやっぱり主人とペットなんて冗談だったんだな。全く、時雨はお茶目なだなぁ！
　パチッ
　時雨は提督に鎖を渡したのち、首輪を外し
「ありがとう、しぐ・・・
　パチンッ
　・・・　れぇ？」
　自分の首に付けた。
「そうだ。僕は提督をペットにしたかったんじゃないんだ。僕は、僕が提督のペットになりたかったんだ」
　んん？んー？
「ありがとう提督、おかげで目が覚めたよ。僕は提督に命令されてあんな事やこんな事をされたかったんだ。僕は提督のペットとして、ずっと一緒にいたかったんだ」
　そっかー。提督さんのペットになりたかったのかー。なら仕方ないなー。じゃあ、主人らしくしないとなー。よし、寝よう（諦め）

「じゃあ時雨、俺の腹から降りておすわり！」
ゾクゾクッ
「う、うん。いや、わんわん！ハッハッハッ」
時雨が提督の腹から降り、ベットの横で正座をした。舌を出し、手を犬のようにして。尻尾や耳を幻視してしまうほど見事な犬っぷりであった。
「よし、いい子だ。じゃ、休暇中鎮守府を頼むよ」
よし、やっと寝れる。あ、この鎖…
「わん！… ち、ちょっと待ってよ提督！」
あーもう！めんどくせぇ！
提督は寝転んだ状態で鎖を引っ張り時雨を引き寄せ静かにキレた。
「ヴッ」
「黙れよ。俺はお前の主人だ。俺の言う事を聞くだけでいい。口答えは許さん」
「〜〜〜〜〜〜ッ… わ、わふぅ〜」
「じゃ、おやすみ」
はぁ、やっと寝れる。

その後の時雨

提督はずるいよ。あんなに強引に言われたら、断れないよ…
あっ、また垂れてきちゃった。ふふ、止まない雨はない… けど、これはしばらく止みそうにないや。
「こんな状態じゃ眠れないよ提督」
収めないと…

「提督っ！提督っ！てっ・・・　主人！主人っ！主人っ―！～～～～ッ！」

「ん～、朝だぁ」
「おはよう、主人っ！」
「は？」

初期艦＋敵＝イ級

浜辺にて、1人の男がぼーっと岩に座りながら海を見ていた。
「迎え・・・ まだかな」
言わずもがな、提督さんその人である。
提督さんのお家は遠く住み込みで提督をしており、休暇を貰って久しぶりに家に帰ろうと迎えを待っているのだが・・・。
ちらりと腕時計を見る。
「30分オーバー・・・ か」
迎えが来ない。
「あー!遅い。お前もそう思うだろ?イ級」
「キュー」コクコク
少し離れた海上から返事が返ってきた。
イ級。地球で一番最初に発見された深海棲艦である。通常は青緑の目をしているのだが、強くなると目の色が変わっていく。
「にしても日本ってネーミングセンスないよな。なんだよイ級って。リ級なんか泣いてたぞ?」
「キュイー!!」
「まぁ、名前が浮かばなくて放置して、日本が名づけた名前をそのまま使ったのも悪いけどよ・・・」
「キュー!キュー!」
「そう怒んなって・・・ あ、そうだ!」
提督は立ち上がり、近くに止めておいたバイクのサイドバッグから何か円盤状の物を取り出し、自分が濡れるのも気にせずジャバジャバと海に腰辺りまで入り、それを掲げた。
「これ、お前好きだろ?」
提督が手に持っていたのは、フリスビーだった。
「キュ、キュ、キュイーーー!」
イ級は凄いスピードで提督の近くまで寄り、身体を擦り付けた。
「そう急かすなって・・・」
提督選手、大きく振りかぶって・・・

「そぉい！」
　投げたっ！
「キューーーー!!」
　天高く飛び上がったフリスビーを追いかけ
「キュイーーーーー!!」
　まるでイルカの様な滑らかな動きで水面から跳び上がり、見事にフリスビーを口でキャッチ。
　バッシャーン
「おー、ナイスキャッチ！さっすがイ級！」パチパチ
　提督はイ級のパフォーマンスに感動し、無意識に拍手までしていた。
「キュイッ！」
「うおっ！びっくりした・・・。急に浮上してくんなって」
「キュキュッ！」
「え？もう一回？しょうがねぇなぁ！」
　フリスビーをイ級から受け取りもう一度投げる。すると、すぐさまイ級が取りに行き、また提督が投げる。また取り・・・　投げ・・・　取り・・・。

「よーし！また投げ・・・　ん？日が落ちて来た？」
　振りかぶった状態を解き、ボーっと水平線を眺める。
「キュイ？」
　投げるのを唐突にやめた提督を不思議に思い近付いてきたイ級。
「ああ、ごめんな・・・　なぁ、あいつらってさ。なんで分かってくれないんだろうな。俺は・・・　地球の支配なんて望んでないってのに」
「キュイ！キュイキュイキュイ～！キュ～」
「そんな事よりフリスビー投げろ？お前なぁ・・・　ん？」
　ふと提督が顔を上げると、遠くに人影のようなものが見える事に気付いた。
「あれは・・・　レ級か？」
「しれい～か～～ん！」

「正解だな」
遠くで両手を広げてブンブンと振るレ級。透き通った声がここまで聴こえてくる。
「じゃ、行くとしますかね」

「もう！司令官ったら！電話に気付かないなんて！」
「すまない。まさか集合場所を間違えていたとは・・・　しかしだな。電話３００件はかけすぎじゃないか？」
「それだけ心配だったの！」
「・・・　申し訳ない」
海上に立ち、喋るレ級と提督。
レ級はプンスカと起こっており、提督はただただ謝っていた。
「こんな事で怒ってもしょうがないわ。帰りましょう司令官。みんなが待っているわ！」
「そうだな、では帰ろうか。あ！あいつらの巡回ルートは覚えているか？」
「当たり前じゃない！さぁ！行くわよ！」
「ああ。イ級、行くぞ」
「キュイ！」
そう言って２人と一匹は海へと潜ってゆく。提督は清々しい顔で、レ級は満面の笑みで。そしてイ級は・・・　ごめん、表情読み取れない。

一方その頃鎮守府では
ガチャ
「時雨、提督さんのお部屋で何してるっぽい？」
「提督を待ってるんだ」
「でも、暫く返ってこないって大淀さんが言ってたっぽい…」
「大丈夫だよ。ずっとここに居るわけじゃないから」
「う～ん、でも早く寝るっぽい！夜更かしはダメっぽい！」
「そうだね。じゃあ、もう少ししたら部屋に戻るよ」
「わかったっぽ～い！」
バタン
「… 行ったね… よし」
時雨は提督のベッドに近づき… 匂いを嗅いだ。
「ふがふが… ふっ… ふっ… ひがっ… んっ… れろっ… ん… ちゅ… じゅる…」
そしてあろうことか舐め出してしまった。
（提督… 提督が帰ってくる頃にはこのベッドはびちゃびちゃだろうね…。提督… 僕は躾のなっていない悪いペットなんだ… だから… 帰って来たらいっぱい躾けてね？）

提督＋深海棲艦＝家族

暗い暗い海の底・・・ 人間であればペシャンコになるであろう水圧の中、二人の男女が海底に立っていた。
「私はこの船に・・・ 帰って来た！」
そう言って両手を掲げる我らが提督さん。その目の前には大きな大きな船のようなものが沈んでいた。
「司令官、お仕事お疲れ様！」
にこっと笑うレ級・・・ 天使かよ。
「じゃ、久し振りに会いに行きますか。我が子達に」スタスタ
「司令官の帰りをみんな楽しみに・・・ って！待ってよしれいか～ん！」タッタッタッ
ここは深海、光などないはずなのに二人はまるで見えているかのように進んで行った。

二人が船のようなものに近づくと
ウィ～ン
ボディの一部が吊り上がり船内に入る為の扉が露わになった。二人は戸惑うこと無く扉に近づく。
「ーーーーーーーー」
何かを呟くと扉が開き、中には
「お、おかえりなさい提督。ご、ご飯にする？お風呂にする？それとも・・・・・・ わっ、わ、た、し？」
顔を真っ赤にしながらも指をついて提督を迎え入れる裸エプロンの港湾棲姫がいた。ってかエプロン小さ過ぎない？色々と見えそうだよ？何がとは言わないがね。
「・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」
しばらくの沈黙の後、白い肌を真っ赤に染めた港湾棲姫の背後からひょっこりと北方棲姫が現れ、港湾棲姫に耳打ちをする。
「ゴニョゴニョ」「えっ、でも・・・」「ツベコベ言ワズニヤル！」「う、う

ん」ガシッ
港湾棲姫は突如そこら辺を泳いでいた魚を思いきり掴み取り、身体とエプロンの間に突っ込んだ。
そしてわざとらしくその場に倒れ込み
「あ、い、いや～ん。魚が入って来ちゃった～。て、提督取って～」
「取るのはいいが・・・」
「え？・・・ あっ」
港湾棲姫の大きな手で思いっきり魚を掴んだのだ。魚が潰れてあたりが赤く染まっている。着ているエプロンも胸の辺りから赤く染まってゆく。軽くホラーである。でも・・・ ヤンデレ港湾棲姫・・・ アリだな。
「あのっ、そのっ・・・ 洗ってきます！」バタバタ
「お、おう。いってらっしゃい？」
港湾棲姫は早足にその場を立ち去り、背後に隠れていた北方棲姫だけが残った。置いていかれた北方棲姫はトテトテとこちらに近づき
「提督、オ帰リナサイ！」
「ああ、ただいま。なぁ、港湾棲姫はどうしたんだ？」
「ワカンナイ！」
「そうか。じゃあ、さっき港湾棲姫になんて言ったんだ？」
「秘密ダ！」
「そっかー秘密かー」
結局なんだったんだろうか。でも秘密を無理矢理聞き出ｓ「離島姐チャント約束シタ！ダカラ秘密！」「そ、そうか」
後で離島棲鬼に聞いてみるとするか。
「提督！ミンナ奥デ待ッテル！ハヤク！ハヤク！」
北方棲姫が提督の服を掴み引っ張る。
「おお、そんな引っ張るなよ・・・ レ級、行くぞー！」
「私はここを掃除してから行くわ！司令官は早く行ってあげて？みんな司令官が来るのを楽しみにしていたのよ？」
そう言って真っ赤な水を尻尾の口から吸い込み始めたレ級。
「わかった、出来るだけ早く来いよ！」

北方棲姫に引っ張られ奥の部屋に連れて行かれる提督をレ級は手を振って見送った。

「で、どこに行くんだ？」

「ソノ部屋！」

北方棲姫がすぐそこの扉を指差す。提督が手を伸ばしその扉に触れる。すると扉はスゥと消えてしまった。そして提督がその部屋に一歩踏み出すと

『おかえりなさい！』

と言う声とともに沢山の深海棲艦が提督に雪崩れ込む。

「えっちょまっグハァ！」

提督は突如現れ雪崩れ込んできた深海棲艦に押し倒され揉みくちゃにされた。

待て待て待て！痛い！苦しい！重い！柔らかい！・・・・　ん？柔らかい？ってかちょ！息が・・・

そんな事を思いながら揉みくちゃにされていると掃除を終えたレ級がやってきた。

「待たせたわね司令官っ！・・・　あれ？あれれ？・・・　もうっ！みんなはしゃぎ過ぎよ！ほら！司令官が苦しそうじゃない！」

そうレ級が一喝すると深海棲艦達は渋々と提督の上から退いていく。

レ級・・・　ありが・・・・・・　と・・・・

「もう・・・　司令官？司令官！司令官!!」

提督は薄れゆく意識の中、ふと思った。
結局柔らかいのは一体…

今日の鎮守府

提督の私室にこっそりと忍び込んだ漣。
「人の気配はなし… 今がチャンス」ボソッ
そう呟きながら提督に使われていた筋トレグッズ達に近づく。
「ふっふっふっ、宝の山ですなぁ。で、では早速… いただきます」
漣は提督のダンベルを手に取り、持ち手を舐めだした。
「ちゅ… じゅる… んふ… こりぇ… しゅご… ひゅぎ… んっ… おいひぃ… もっろぉ…」
今度はダンベルをしゃぶりだす漣。
「じゅるるるる… んはぁ… んちゅ… じゅる… はぁ…」

漣の右手がゆっくりと下半身へ…
「漣」「んひゃぁ!?」
漣が驚いて後ろを振り返るとそこには
「なにをしているのかな?」
何故か時雨がいた。
「あのですね… これは… その…」
目をぐるぐるさせながらもなんとか誤魔化す案を考えるが…
「提督のダンベルを舐めて自慰してたんだよね?」
見られていたならどうしようもない。漣の目からハイライトさんがコンビニに行った。
「……… はい。あの… みんなには内緒って事には出来ませんか時雨様。間宮券なら好きなだけ「要らないよ」… なにが望みだぁー!」

「しーっ、静かにして？望みもなにも僕も提督の部屋に侵入してるんだよ？周りに言えるわけないじゃないか」
　漣の目にハイライトさんがコンビニから帰ってきた。え？なに？ガリガ○君買ってきたの？一つくれんの？ありがとう。
「ふぅー、社会的に死ぬかと思ったー。あり？時雨殿はどうしてここに？」
「なぁに、漣と一緒だよ？」
「一緒？」
　首をかしげる漣。
「つまり…」
　時雨は落ちているハンドグリップを拾い…　持ち手をしゃぶり出した。
「んっ…　ぺろっ…　ぺろ…　んじゅるるるるるるるっ!!」
「なっ…　なっ!?」
「ちゅぽっ…　ね？一緒でしょ？…　ねぇ漣。美味しいよ？一緒に食べよ？ほら、ハンドグリップはもう一つあるよ？」
　そう言って差し出されたハンドグリップ。漣にはとても魅力的に見えた。
「む……」
「要らないのかい？じゃあこれは僕が…「あっ……」やっぱり欲しいんだよね？正直になりなよ。きっと

気持ちいいよ？

「あっ…　あ…　あああ!!……　ぃ」
「なに？聞こえないよ？」
「…　欲しい！欲しいです！下さい！」
　漣は誘惑に、負けた。
「れいろく…　れろ…　んふっ…　んっ…」
「ごしゅりん…　んにゅ…　ひゃまぁ…」
　二人の艦娘に友情が芽生えた瞬間である。

揚陸艦＋蜻蛉＝あきつ丸

皆様。自分は、陸軍の特種船丙型のあきつ丸であります。
強襲揚陸艦の先駆けのような自分でありますが、新兵器のオートジャイロなども運用して、対潜戦でも奮闘したいのであります。
何卒お願いするのであります。
そしてルート固定丸だとか器用貧乏丸だとかア○ルキツキツ丸だとか思ったそこのお前は後で沈めるので覚悟しろであります。全く、誰がキツキツでありますか。提督の所為でもうガバガバ・・・ おっと、なんでもないであります！
そんな自分はたった今
カリカリカリカリカリカリカリ
提督不在の鎮守府で、提督代理をしているのであります！
「むふふ・・・」
いやぁ～、マヌケでありますな海軍は。倒さねばならない敵が侵入しているというのに気付かないなんて・・・ 本当にマヌケでありますなぁ！
「あーっはっはっはっはごっ！ぐぼっ！ごほっ！ごほっ！」
うう・・・ 慣れない高笑いは止めるべきでありますなぁ・・・。
ん？秘書艦はどうしたのか、でありますか？それでしたらそちらのソファーで・・・
「すぅ・・・ すぅ・・・」
自分の秘書艦のモグ・・・ まるゆが寝ているであります。
正直なところ全然使えないでありますが、仲が一番よく、万が一自分の事がばれても簡単に丸め込めるのであります！
まるゆは自分の事を同じ陸軍出身だと思っていて好意的に接してくれているのでありますから、少しだけ心が痛むのであります・・・
まぁ、提督のナデナデかまるゆかと聞かれたら少し迷って提督のナデナデを選ぶ程度の情ではありますが。
にしても提督殿は毎日この様な仕事をこなしているのであります

か？終わる気配が無いであります。これならたまにある出撃の方が断然楽でありますなぁ。しかし出撃は出撃で日焼けが「邪魔するわよ」ん？誰でありましょうか

執務室にお邪魔したのはツンデレ四天王の一角である綾波型　8番艦の曙。つまりみんな大好きぼのたんである。

「おお、ぼのたん殿「ぼのたん言うな！」…　何用でありますか？」

「あきつ丸がきちんと提督が出来てるか見にきただけよ…　な、なによニヤニヤして」

「いえ～？なんでもないでありますよぉ～？別にぃ～？」ニンマリ

「な、なによ…」

「分かっているでありますよ」

「!?な、何がよ」

「曙殿は提督のお役に少しでも立ちたくて仕事を貰いに来たのでありましょう？そして提督がお帰りになった際には褒めて貰おうとか思っているのでありましょう？曙殿も隙がありませんなぁ？」

そのまま口が上へ飛んでいくかのように高く口角を上げるあきつ丸に図星を指された曙は慌ててどうにかすっとぼけようとした。

「なななななっ、ななっ、なんのことっととかしら？」

駄目だ慌てすぎて全然すっとぼけられてない。

「曙殿は本当に分かりやすいでありますね。仕事なら秘書艦の仕事がまだあるであります。まるゆが寝てしまったので丁度人手が欲しかったのであります。さて、どうするでありますか？」ニヤァ

「こ、こ、こんのクソ蜻蛉！…　だれが秘書艦の仕事なんて…　で、でも人手が足りないならしょうがないわ！そう、これはしょうがない。しょうがないから私が手伝ってあげるの。べ、別に帰ってきた提督に褒められたいなんて思って無いんだから！」

なんやかんや言いながらもやってくれるラブリーマイエンジェルぼのたん！ぼのたん天使！マジ天使！

「素直じゃないでありますなぁ…　さ、この書類をお願いするのであります」

「いいわよ」

曙はあきつ丸から紙を受け取り、秘書艦用の執務机で作業を始めた。
執務室はまたペンを走らせる音のみになる。
カリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカ「ねぇあきつ丸」
沈黙に耐えかねたのか話しかける曙。
「?なんでありますか?」
「すぅ・・・ ふぅ・・・ ごめんね」
??深呼吸をした後、キリッと真剣な表情になりあきつ丸に謝る曙。
「????」ずずっ
あきつ丸は何故謝られているのか分からなかった。さっきからかったのは自分の方であるはずなのに・・・。考えてもわからないあきつ丸はとりあえず落ち着こうとお茶を飲む。
「あの・・・ 実はね・・・ 私、最初あきつ丸の事を深海棲艦だと思ってたの」
「ごぶぉぶぁぼっ!!」
あきつ丸は盛大にお茶を噴き出した。しかし書類は一切濡れていない。流石あきつ丸、噴き出す寸前に自分の顔を下に向け床とひざにお茶をぶちまけたのだ。
「うわお茶が!拭くもの拭くもの!」
あきつ丸は椅子から立ち上がり洗面所に向かおうとする曙に問いかける。
「な、何故自分が深海棲艦だと?」
動きがぴたりと止まりこちらを見る曙は申し訳なさそうにもじもじとしながら理由を話してくれた。
「いや、その・・・・・ 肌が真っ白で・・・ 片言を喋っていたから・・・ 知性を持った深海棲艦にしか見えなくて・・・ あの時は配属されたばかりで疑心暗鬼になってて・・・ 今まで本当にごめんなさい」
「は、肌は白粉で、片言だったのは緊張していたからでありますよ!」
「わかってるわよ!でも、初めはそう見えてキツイ態度をとっちゃって・・・ その・・・ ごめん」
「想像力豊かでありますな・・・ あ、なるほど!だから当たりがキツ

かったのでありますな。自分はてっきり提督と仲がいい自分に嫉妬しているのだとばかり」
「そ、そんなわけないわよ！」
　実はその理由もちょっぴりあった。
「・・・　ところで曙殿。できればタオルか雑巾をお願いしたいであります」
「あ！ごめん！持ってくるわ！」
　そう言って執務室の扉を開けダッシュで洗面所までタオルを取りに行く曙を見届けてホッとするあきつ丸。
「ふぅ・・・・」

「あっっっっっっぶねぇのでありますぅ！」
　椅子から立ち上がり胸を押さえるあきつ丸。
「曙殿は想像力豊か過ぎるでありましょう!?しかも正解とはタチが悪い！」
　天に向かって叫んだあきつ丸はがくりと脱力して机に突っ伏した。
「はぁ・・・　はぁ・・・　よかった・・・　ボロを出さなくて本当に良かったであります・・・　背後からズドン！とか洒落にならないであります」
　ニヤリ
「まぁでも？曙殿も結局は騙し切ったのでありますし？やはり海軍はクソザコでありますなぁ！あーっはっはっはっはお”!?ごべぇぁ！ごぼっ！かはぁ！」
　うう・・・　高笑いの練習をするべきでありますな。
「タオル持って来たわよ！」
「おお、ありがとうなのであります！」
　さて、拭いたら曙殿と一緒に頑張るでありますか！

「あ、そこ間違っているであります」
「えっ？・・・　わ、わかってるわよ！」

「あわわわわ！すいませんあきつ丸さん！曙さん！」
「大丈夫でありますよ」
「はい、まるゆちゃんの仕事」

「遠征から帰投したよ。不死鳥の名は伊達じゃない」
「お帰りであります。書類はそちらに・・・」

「あんのクソ提督！こんな本を隠してるなんて！こ、こんなエッチな・・・」
「それ、深雪殿から没収したものであります」
（絶句）

「じゃあ、まるゆを送るわ。仕事は程々にね？おやすみあきつ丸」
「おやすみであります。あと少しで終わるので心配ご無用であります」
「あきつ丸さん、おやすみなさい」
バタン
「ふぅ・・・ 今日は大変でありましたな。明日もあると思うと嫌になるのでありますよ・・・」
うだうだといいながら帽子を取る。帽子で隠れていたその頭には先端が赤く染まった二つの小さな角が生えていた。
「さて、提督に今日の戦果やらを連絡するとするでありますか」
懐から携帯を取り出し提督に電話をかける。
おや？出ないでありますなぁ・・・ まさか提督の身に何か良からぬ事が！・・・ あるわけないでありますな。雷・・・ レ級殿が一緒にいらっしゃるので大丈夫でありましょう・・・。明日改めて連絡するであります。しかし、念の為。

執務室の扉を開け
「さぁ、カ号のみんな、出番であります」
そう言ってカ号観測機を送り出した。

しかし提督のお声が聞こえないとなりますと今日のオカズが・・・
はっ！ここ執務室では提督が！毎日！作業を！はぁはぁ・・・ 今日のオカズが決まったでありますな・・・。

「あ”ーーーーーーーーーー♀」

「お尻に執務机の脚・・・ イケルでありますな！」

クール＋マゾ＝若葉

今、ある男が船内にて目覚めた。
「ぐっ・・・ 墜ちる・・・ 操縦が・・・ ぬぅ・・・・・・ はっ！」
そう、我らが提督さんである。
「・・・ 夢・・・ か・・・」
ベッドより跳ね起きた提督さんは汗びっしょりで、そして全裸であった。脳内ピンク一色な艦娘達には大喜びされるだろう。
「ん？汗？ああ、水を抜いたのか」
水を抜いたという事は・・・ ああ、やっぱり。
提督が寝ていたベッドの右側にはテーブルがあり、その上にはいくつかの皿に料理が載っていた。
きっとレ級が作ってくれたんだな・・・ ありがとう、レ級。所でここは・・・ 私の部屋か？うん、配置は変わっているが私の部屋だ。さて、ではいただくとしましょうかね。
すると提督は全裸で食事を始めた。
「おお、これは鯖の味噌煮じゃないか！・・・ うまい・・・」もぐもぐ
提督がｍｇｍｇしていると背後にある扉が開いた。
「オイ！提督！」
「ん？北方棲鬼じゃないか。どうした？」
「唇クレ！」
「!?ぐっ、ごっふ、ぶふぉ・・・ い、いきなりどうし「北方!?イキナリ何処二・・・ アッ」あっ」
先程北方棲鬼が入ってきた扉からやってきたのはボンネット装備のロリ深海棲艦こと離島棲鬼。最近こっそりとパソコンで漫画やイラストを描いたり小説を書いたりしているそうだ。提督にはバレていない。というか提督にだけバレていない。
「おお、離島棲鬼！今帰ったぞ！」
お前は父さんか。
「オ、オ帰リナサイ。ッテ人間ガ付ケタ名前ナンカデ呼バナイデ！」
「はいはい。ただいまりっちゃん」

「ソウジャナイワヨ！番号デ呼ビナサイ！」
　すると扉からもう一人。
「呼ビマシタカ？」
「リ級ハ呼ンデナイワヨ！全ク、薄汚イ人間ニ付ケラレタ名前ナド・・・」
「所で離島姐チャン！提督ノ唇ッテナンダ？ネーネー！」
　ブツブツと言いながら立ち去る離島棲鬼、その後を追う北方棲鬼。
　部屋には全裸提督とリ級が残った。
「・・・鯖の味噌煮、食うか？」
「イエ、ソンナ・・・」
「遠慮するな、ほら！あーん」
「ア、アーン」
「うまいだろ？」
「ウ、ウン。美味シイ」
　さて、離島棲鬼へのお仕置きは何にしようかなー。

　離島棲鬼は人間が嫌いだ。提督を敵として戦う人間が大嫌いだ。提督に与えられた番号があるというのに勝手に名前を付けてくる。提督に好意を持ち、関わる人間もいる。そんな奴らも嫌いだ。だって私と提督が会える時間が、喋る時間が、あの楽しい時間が減ってしまう。
　パソコンを起動する。
　人間は嫌いだ。そのなかでも、一番嫌いな種類の人間がいる。
　そして、何時ものサイトを開いた。
「ッモウ！ナンデ私ト提督のラブラブ本ガ無イノヨ！何時モ何時モ提督ト絡ムノハ艦娘バカリ！ナンデヨ！提督ト私ノラブラブ本ガアッ

タッテイイジャナイ！監禁ヤ調教デモ相手ガ提督ナラ喜ンデコノ身体ヲ差シ出スワ！ヨシ！今日モ元気ニ描クワヨ！流行レ！私ト提督ノ本！」

離島棲鬼は、人間が嫌いだ。

「ア、ソウイエバナンデ提督ノ所行ッタンダッケ？マア、イイカ」

「ムニャムニャ・・・ レップウ・・・ 置イテケ・・・」

提督の居ない鎮守府にて、黙々と遠征をこなし、黙々と戦い、黙々と仕事をするとある駆逐艦がいた。

「駆逐艦、若葉だ。艦隊が帰投した」

そう、提督の秘書艦になれば２４時間寝ずに働き、敵の攻撃を受ければ悪くないとまるで効いていないかの様にクールに振る舞う。

「お疲れ様であります！・・・ ってちょっと！どこに行くのでありますか！」

「出る」

「いやいやいや！ふらふらでありましょう!?」

「２４時間、寝なくても大丈夫」

「若葉殿、睡眠はきちんと取らないと駄目なのであります！」

「大丈夫だ」

「絶対に大丈夫じゃ無いのであります！」

「安心しろ」

「何処に安心する要素があるのでありますか！ほら、早く！今日はもう遅いですので・・・」

「くっそぉ…」
「そのまま自分の部屋に戻って今日はもう寝てください」

執務室から追い出された若葉は初霜と自分が使っている部屋へふらふらと向かった。今の時刻はヒトヒトマルマル頃、こんな時間には誰も廊下を歩いたりしていないだろう。
「寂しいよ… 提督…」
そう口に出した途端、目から何かが溢れそうになった。慌てて目元を拭うが、止め処なく溢れ続ける。
「私… 頑張ったよ… 弱音なんか吐いてないよ…」
もう前すら良く見えていない。だが何万回と通ったこの道だ、目をつぶってでも壁にぶつかる事はないし、部屋を間違える事もない。
「ひっく… だから提督… 安心し”て”…」
溢れて一向に止まる気配がない涙を拭うのをやめて、部屋を目指す。
「安心し”て”… た”い”し”ょ”う”ふ”… た”か”ら”ぁ”…」
彼女は提督に言われたのだ。俺は暫く居なくなるけど… この鎮守府を宜しく頼む… と。
「ひっぐ… うう… ぐすん」
自分が弱音を吐くわけにはいかない。自分が休むわけにはいかない。自分が泣くわけにはいかない。そう言い聞かせて働いた。全ては提督の為に。提督が安心して帰ることが出来るように。そして… 褒めてもらえるように。ああ、きっと無愛想な返事しか出来ないんだろうな。でも口は勝手に釣り上がってしまう。そんな事を考えるだけでまた溢れてしまう。ふと、自分の足が止まる。おや?ああ、いつのまにか自分の部屋の前まで来てしまったのか。
流れっぱなしの涙を拭う。
初霜に泣いている姿を見せる訳には行かない。初霜も提督が居な

くなって不安になっている筈だ。姉である私が泣いていてどうするんだ！

今日は布団の中でこっそり泣こう。そして、明日からまた頑張ろう。

そう決めて、部屋の扉を開けた。

「提督の魚雷発射管の角度調整しゅごいのぉぉぉぉぉ！私のぷっくり膨らんだ魚雷発射管かられちゃうのぉ！んひゃい！しょれらめっ！わ、わらひの右のピンク色の電探しゃんが黒くなっちゃうぅぅ！その輪形陣使っちゃ駄目でしゅ！お祝いしゅるにはその輪形陣はいりましぇん！生で！生でぶち込んでくらひゃいいいいい！」

「」スン…

そっと若葉は、妹に弾をぶち込んだ。

写真＋レコーダー＝修羅

深海棲艦には二つの勢力があった。
一つは提督率いる穏健派。
人類との共存を望んでおり、過激派と日々戦っている。争いを好まない者、人間が好きな者、提督の意思に従うという者。主にこの三種類の深海棲艦が所属している。
艦娘と出会えば蹴散らすか見て見ぬ振りをする。
提督の命令は絶対。
みんな提督が大好きで護りたいと思っている。
そして二つ目が駆逐古鬼率いる過激派。
自らを過激派と名乗り、提督にもそう呼ばせている。
提督にこの地球を支配してもらう事を望んでおり、艦娘と戦うのは殆どこいつら。戦いが好きな者、人間が嫌いな者、提督を困らせたりしたいという者、元艦娘の者。主にこの四種類の深海棲艦が所属している。
艦娘と出会えば基本即戦闘である。
提督を困らせている事は理解しているが、提督の為なので致し方なし。
みんな提督が大好きでこの地球を捧げたいと思っている。
流石我らが提督！愛されてるな！（白目）

そして、過激派筆頭の駆逐古鬼は今…

「ダカラサ……　ソンナノ作ッタッテサ……　何ニナルノサァ！」
「何よ？カレー作ってるだけじゃない」
レ級と一緒にカレーを作っていた。
何故この様な事になってしまったのか。それは提督が深海棲艦に押し潰される少し前まで遡る。

「おお、そんな引っ張るなよ…　レ級、行くぞー！」
「私はここを掃除してから行くわ！司令官は早く行ってあげて？みんな司令官が来るのを楽しみにしていたのよ？」
　そう言って真っ赤な水を尻尾の口から吸い込み始めたレ級。全て吸い込み終わり、外へ出す為に先程入って来た扉を少し開け赤い水を排出した。すると
「ウワァ！目ガァァァ！目ガァァァァァァァ！」
　手を目元に当てとある映画の大佐の様な事を言いながら転げ回っていた。
「ん？あら？駆逐古鬼じゃない！今日はどうしたの？そしてそれただの血よ」
「目ガァァァ…　ナンダ、タダノ血カ…　ア！ソウダ！今日ハ我ラガ主ガ帰ッテ来テイルンダロ？」
「ええ、そうだけど…」
「一目！一目デイイカラ見セテクレ！」
「貴女…　地球を手に入れるまで司令官禁するんじゃなかったの？どうせ司令官禁とか言いながら夜な夜な司令官で自慰でもしてるんでしょ？」
「ナ！ナ、何故ソレヲ！」
「えっ!?本当に!?」
「アッ……　兎ニ角頼ム！」
「うーん」
　レ級は少しばかり腕を組み考え。
「条件があるわ」
「オ願イダ！何デモスル！モウ耐エラレ無イ！」
「ん？今なんでもって言ったかしら？じゃああの扉の奥にエプロンあるからそれ着けて待っててちょうだい」
「エ？エプロン？」
「じゃ、司令官待たせてるから！」
「チョ、チョット！…　行ッテシマッタ…」
　一人取り残された駆逐古鬼は戸惑いながらもレ級が指した扉の奥

へ向かうのだった。
そこは厨房であった。
戻ってきたレ級が取りに行っていた花柄のエプロンを駆逐古鬼に着せて何か準備をし始めた。因みにレ級はハート柄であった。
そして二人はカレーを作り始めた。

「ヤメダ！ヤメ！面倒クサイ！」
「あら？いいのかしら？」
「ア？何ガ「司令官が食べるのよ？」…」スッ
すると寸胴に自分の足をかけて入ろうとする駆逐古鬼。
「ちょ、ちょっとなんで鍋に入ろうとするのよ！」
「一生ノオ願イダ… 主ニ私ヲ食ベサセタイ。イヤ、食ベラレタイ。性的ニモ、物理的ニモ」
「こら！キチンと司令官に言ってからにしなさい！いきなりだと司令官がびっくりしちゃうでしょ？」
「ソ、ソンナ事無理ニ決マッテイルダロ！主ト顔ヲ合ワセルトカ…ハ、恥ズカシイ… 死ンデシマウ… ア！」
何か閃いたのか、顎に手を当て考え始めた。
「ん？どうしたの？」
「ソウダ… コウスレバ… 艦娘ヲ… ヤレル…」ブツブツ
「おーい、おーい？」
「ソウト決マレバ…」ブツブツ
「おーい！おーい！聞こえてるー？」
「ヨシ！ジャアナ！」シュバッ
「あ、ちょっと… 行っちゃった。一体なんだったのかしら？… あ！カレーカレー！ふぅ… あ、そういえば港湾棲姫が握りつぶしたこの魚どうしましょう… 味噌煮でいいわね！司令官お味噌好きだし」

レ級達がカレーを作った次の日の早朝。とある鎮守府の駆逐艦寮に一つのボイスレコーダーが投げ込まれた。写真付きで。

その内容は

『ヤァヤァ、艦娘諸君。オ前ラノ提督ハイタダイタ。ドウスルノカッテ？ソレハコレカラ私ガ・・・ エット・・・ ソノ・・・ エ、エッチナ事ヲシ、シチャウゾ！ソレガ嫌ナラヒトサンマルマルニ・・・ ドコダッケ？・・・ ア！北太平洋マデ来ナサイ！詳シクハ近クニ来テカラ教エル』

というもので写真にはベッドで眠る提督と満面の笑みを浮かべて自撮りをしている駆逐古鬼のツーショット写真だった。駆逐古鬼の顔が真っ赤であったのは言うまでもない。

その日、艦娘は修羅と化した。

「写真ナラナントカ顔ヲ見ラレルシ艦娘モ釣レル！流石私！天才ダ！」

「んっ！・・・ 大丈夫っ・・・ まだっ、航行可能ですっ・・・ だから提督・・・もっと！もっと！もっと虐めて下さいっ！」

艦娘達が修羅と化す少し前。

提督不在の鎮守府では駆逐艦寮陽炎型室のベッドで浜風が日課の自慰をしていた。

提督が居なくなる前は本人がどうにか我慢して1日3回までに留めていたが、提督が居なくなってからは寂しさと解放感で猿の様に盛り、1日15回という恐ろしい数字を叩き出していた。

参考までに言うがあの空母加賀でも1日14回である。

い加賀わしい・・・。

浜風が自慰に浸っているとガシャーンと急に窓が割れ、何かが飛び込んできた。
浜風は自慰行為の途中だったにもかかわらず、窓が割れた途端に艤装を展開し、飛び込んできた何かに砲身を向けた。
「敵しゅ・・・ う?」
そして、こんな姿を同僚に見られたら色々と終わるというのに真っ先に危機を知らせようとしたのは流石艦娘と言った所だろうか。
「これは・・・ なに?」
飛び込んできたのは黒く四角い箱だった。なんの変哲もないただの箱である。強いて特徴を挙げるとするならば妙につやつやしている事だろう。
浜風が主砲をその箱に向けながらどうしたものかと考えていると。
「なんだ今の音は!大丈夫か!」バキィ!
割烹着姿の磯風が扉を蹴破り飛び込んできた。
するとそこには顔が赤く太ももから液体を垂れ流して艤装を展開している浜風の姿が・・・。

「「あっ」」
そして、この蹴りを喰らった扉は後にこう語った。
『ありがとうございます!』

「浜風は、喜んでくれるだろうか」
今日、非番である磯風は先程まで厨房で秋刀魚を焼いていた。
出来上がった焼き秋刀魚を同じく非番の浜風に味を見てもらおうと陽炎型の部屋を目指して歩いていると

ガシャーン

「!?なんだ今の音は!」

磯風はすぐさま艤装を展開し、音のした方へと向かった。この時焼き秋刀魚は磯風の手から離れ、窓を飛び出し、偶々偶然そこを歩いていた扶桑姉妹の姉の口へと向かった。
「ああ・・・ 提督、空はどうしてあんなにも青いのでしょう・・・。 私の心も、提督にむぐっ・・・・・ うおぇぇぇぇぇぇぇ！」
「えっ!?ね、姉さまぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」
「な、なに・・・ この口の中に広がるのは・・・ うっ・・・ やっぱり私、沈むのね・・・ 山城が無事なら良かったわ・・・」
「そんな・・・ 扶桑姉さま・・・ あちらの世界でも・・・ ご一緒に・・・・・」
「山城・・・」
「姉さま・・・」

そんな事があったとは全く知らない磯風は音がした部屋へと向かう。

（ここは陽炎型の・・・ 今日は浜風しか居ない・・・ 一体何が！）
磯風は助走をつけ扉を蹴破り、すぐさま主砲を構えた。
すると何とそこにはえちえちな感じの浜風が、えちえちな格好でさもえちえちをしていたであろう証拠が目一杯の状態で、窓硝子が割れ、艤装を展開した状態でこちらを見ていた。
磯風はすぐに察した。

（きっと絶頂し過ぎて艤装を展開し窓を撃ち抜いてしまったのだ）
磯風は回れ右をしてその場から離れようとしたが
「違う！違うの！誤解だから！」
・・・ どうやら誤解らしい。正直何処を誤解すればいいのか分からないが、取り敢えず浜風の話を聞いてみる事にした。

取り敢えず双方艤装をしまい、浜風は必死に誤解を解いた。
「ふむ、なるほどな」

「分かってくれたのね…」
誤解が解け、ホッと胸を撫で下ろす。
「にしても急に箱が… 開けてみないか?」
実は浜風が必死に誤解を解こうとしている最中もずっと黒い箱が気になって仕方がなく全然話を聞いてなかった。今もどうやって開けるか弄っている。
「全然話聞いてない…… いや、何か危険なものかも「なんだこれは?」もう開けてるじゃない!」
箱の中に入っていたのはボイスレコーダー。磯風はそれを取り出し、好奇心でついスイッチを入れてしまった。
浜風はすぐざま艤装を展開し、割れた窓から飛び出した。磯風が必死に待てと叫ぶが浜風には届かない。磯風は取り敢えず浜風を放っておき、このボイスレコーダーを持って執務室へと向かい、放送で流した。すると全艦娘が執務室に一瞬で集まった。皆、怒りで震えていた。
あきつ丸は恐怖と困惑と胃痛で震えていた。
「もう… どうにでもなれ… であります」